
杉下左京の休息

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杉下左京の休息

【Nコード】

N1219I

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

俺杉下左京は、暇つぶしに喫茶店に行った。そこで意外な人物と会う。

俺の名前は杉下左京。

警視庁特別捜査班の班長だ。

本当は雑用係のような事をしているのだが。

先日、あの真面目な亀島が突然休暇願を出した。

「別に俺達には仕事がある訳ではないから、好きなだけ休んで楽しんで来い」

そう言ったのだが、何故か奴の顔色は冴えなかった。

何かあったのだろうか？

確か、經理の連中の話では、女性が尋ねて来て、それから様子がおかしいようだ。

誰だろう？

あいつに彼女はいないはずだが。

俺と違って、内向的でモテないからな。

今度所轄同士の合コンがあるらしいから、誘ってあげよう。

きつとあいつの事だから、振られて落ち込んでいるのだろう。

亀島が休暇でないと、只でさえ暇な特捜班は更に暇になってしまっ。

俺は庁舎を出て、行きつけの喫茶店に向かった。

カランコロン。

喫茶店のドアらしい音がする。

俺はこういう古めかしいところが好きだ。

もう何年も通い詰め、すでにマスターとはすっかり顔なじみだ。

いつもの窓際の席に着く。

外を忙しく歩くビジネスマンの姿を見るにつけ、自分の仕事のあまりの情けなさに悲しみがこみ上げそうになる。

そばにあるラックから新聞を取り、四コママンガに目を向けた時、ウエイトレスが水を持って来た。

「いらっしゃいませ。」注文はお決まりですか？」

俺はその声になんか聞き覚えがあったのだが、マンガのオチを見ている最中だったので、顔を上げずに告げた。

「いつもの」

「いつものですか？ そのようなものはメニューにございませんがウエイトレスはイラッと来るようなおっとりした声で答えた。

「いつものって言えば、いつものだろ？」

俺は堪りかねてウエイトレスを見た。そして凍りついた。

「やはりそのようなものはこのメニューにはございませんが」

と言って笑顔全開でこちらを見たウエイトレス。何でこいつが？

「あ、あんたはあの時のメイドさんじゃないか！」

俺は場所柄も弁えずに叫んでしまった。

店内の全員が俺を見た。

「お客様、私をご存じなのですか？」

そのウエイトレスは、つい先日、冤罪になりそうなところを我々が助けた御徒町樹里おかちまち しゅりだった。

「忘れたんかい！」

俺は彼女の記憶の片隅にも残っていない事を知り、ムカツとした。

言ってみれば、俺はこの女の命の恩人同然の存在なのだ。

それなのに、覚えていないとは……。

情けない。

「俺だよ、俺。杉下左京。警視庁の特捜班の」

樹里はニコツとして、

「ああ、亀島さんの部下の方ですね」

「違うう！ 亀島が俺の部下なの！」

「そうなんですか」

何で喫茶店でこんなにイラつかなければならぬんだ。

面倒臭い事になりそうだ。俺はここでいくら主張してもラチが開かないと思い、

「ブレンド。マスターに杉下左京だと言えば、わかるよ」

「はい」

見た目は可愛い分、あの天然は致命的だ。

世の中には不思議な人間がいるもんだ。

マスターはどうしてあんな女を雇ったのだろう？

この店、潰されるぞ。

……。

しかし、その心配はないようだ。

バカはたくさんいる。

店内は、あの女の容姿に騙されて、たくさんの若い男達がいた。

お前等、一度でいいからあいつとサシで話してみろってんだよ。

思い出すだけでイラつくあの取り調べの日。

「お待たせ致しました」

樹里が戻って来た。

「おう」

俺はカップを受け取り、口に運ぶ。

「あれ？」

コーヒーがいつものと違う。

「何だこれ、缶コーヒーみたいな味がするぞ」

俺は匂いを嗅いだ。やっぱり以前と違う。

「むっ？」

いつもの喫茶店のつもりで入ったので、内装をよく見なかったが、今良く見てみると、怪しさ満点だ。

何だ、この雰囲気は？

喫茶店じゃないぞ。

奥の席は囲われていて、中の様子がわからない。

まさか？

おいおい、いつの間にカップル喫茶になったんだ？

俺は席を立ち、カウンターに近づいた。

「お客様、お帰りですか？」

樹里が笑顔で近づいて来た。

「おい、あんた、悪い事は言わない、この店をやめろ」

「えっ？ それはもしかしてプロポーズですか？」

樹里は顔を赤らめて突拍子もない事を言ったのけた。

「そんな訳ないだろ！ 怪しいからやめろって言ってるんだよ」

俺は小声で言った。しかし樹里は俺の話を聞いていなかったよう
で、

「コーヒーとテーブルチャージで五万円になります」

とコンビニのレジのように軽く言った。

「う、五万円？」

ボツタクリバーならぬボツタクリ喫茶かよ。こんな昼間から、何
て事してるんだ？

「おい、ここはボツタクリの店か？」

俺がカウンターの向こうにいる男に尋ねると、

「お客さん、妙な事言わないで下さいよ」

と凄んで来た。

虫の居所の悪い俺の、ストレス解消の標的に丁度いい。

そいつは俺を締め上げようとして近づいて来たが、逆に腕をねじ
上げた。

「いてて！」

「警察だ！ 静かにしろ！」

その途端、様々な格好をした男女が飛び出して来て、逃亡した。

何なんだ、ここは？

結局、俺は応援を呼び、店を搜索した。

どうやら薬も売っていたらしい。

樹里は大丈夫なのだろうか？

何故か心配している自分に驚いた。

彼女は確かにど天然だが、美人だし、性格は良さそうだ。

心配したくなるのも仕方ないだろう。

薬物検査の結果、彼女は陰性だった。

勤め始めてまだ三日目だそうだ。

もう少し遅ければ、薬漬けにされて売り飛ばされていたかも知れない。

「助けて頂いてありがとうございます」

警視庁のロビーで、俺は樹里に礼を言われた。

「警察官として当然の事をしたまでさ。礼なんていいよ」

「そうなんですか？」

間近で見ると、やっぱり可愛い。

度を過ぎた天然でなければ、間違いなく口説いている。

「あの」

樹里は何故かモジモジしながら、小さな紙切れを俺に差し出した。

「今度お電話下さい。これが連絡先です」

「お、おう」

俺は酷くドキドキして、それを受け取った。

「失礼します」

樹里は笑顔で立ち去った。

俺はしばらく彼女の後ろ姿を見ていたが、紙切れの事を思い出して特捜班室に走った。

ロビーなんかで見えていたら、誰に覗かれるかわからないからな。

「さっさと」

はやる気持ちを抑えながら、俺は紙切れを見た。

「……………」

それはキャバクラの名刺だった。

源氏名はジュリー。写真付きだ。結構可愛く撮れている……………。

いや、ダメだ。

もう本当に知らん。あいつがどうなっても関係ない。

俺は呆れ果てた。

……………。

しかし、もう一度名刺の住所と電話番号を確認してしまうのは、男のサガであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1219i/>

杉下左京の休息

2010年11月13日02時46分発行